# 中ソ接近と日本

中嶋嶺雄

## 日中、米中関係のヒビ割れ

1970年代初頭から80年代初頭にかけての10年間における国際環境をふり返ってみると、70年代初頭は、ニクソン訪中に象徴される米中接近、日中国交正常化に象徴される日中友好があり、太平洋をはさんで米、日、中の連携関係が国際政治にひじょうに大きな潮流としてクローズアップされた。

このような潮流は、暗黙のうちに、あるいは覇権主義反対といった、明確な形でソ連を意識したものであった。ひとくちに反覇権連合といってよいと思う。ソ連の脅威を当時の中国は誰よりも鼓吹していた。日中平和友好条約の交渉に当ってはどうしても覇権条項を入れて欲しいというのが中国の立場であった。そういう中国の主張に誘われて、わが国は覇権条項入りで日中平和友好条約を結んだ。

80年代初頭の今日、反覇権戦略がどれくらい有効性をもつのであろうか。最近、中国はソ連を批判することをピタリと止めてしまった。単にソ連批判を止めたのみならず、中国があれほど密接な関係を望んでいた米国とは冷えきってしまい、当分改善される余地はない。こうなってくると、果して反覇権連合というようなことがいえるのだろうか。いってみればわが国は中国の主張に乗って2階に上がってしまったところ梯子を外されてしまった感がある。のみならず，わが国はこの間特に軍事化したわけではなく、ＧＮＰに占める防衛費の比率は依然１％以下であるのに、昨年の教科書批判にみられるように、たいへん激しい日本軍国化批判、右傾化批判を中国は投げつけてきた。さらに中国は米国に対しても最近は、米国自体が覇権主義だと批判している。先日の女子テニス選手胡娜の亡命事件に際する対米批判にみられるように、中国の米国に対するいらだちはひじょうに増幅している。

米国はレーガン大統領が台湾への同情を主張することによって当選してきただけに、ひじょうに中国に気をつかってきた。まさにはれものに触わるように中国を扱ってきたが、ヘイグ前国務長官、シュルツ現国務長官が訪中しても関係修復はできなかった。

このように考えてくると、日本が変ったわけでもなく、米国が変ったわけでもなくて、変っ

たのは中国である。中国自身の世界戦略がこのところ根本的に変ったことを最大の理由にしていると私はみている。

シュルツ国務長官が訪中したとき、趙首相の訪米を要請したが断わられたも同然であり、来年は大統領選挙もあることから、当面米中関係が急速に修復される見通しはない。逆にますます冷却化する可能性すらある。

わが国もまた、桜内前外相や二階堂自民党幹事長が訪中しているが、このような特使を常に派遣していないと、いつ中曽根批判が始まるか分らない状況にある。中曽根首相が就任早々に訪韓したとき、中国は、日韓関係の強化は南北朝鮮分断の固定化であると批判した。

中国はどのように変ってきたのであろうか。中ソ関係を考えると、これまでソ連は関係改善の働きかけを何度も行なってきている。ソ連は米ソ対立という国際政治の大きな枠組のためにも、中国が自らの陣営に再び戻ってくれれば、こんなにいいことはない。ソ連の側からは中ソ関係を阻害する要因は何もない。問題は中国にある。毛沢東時代、中国はソ連との対決をひじょうに強調していた。しかし、最近ソ連に対する基本的な認識を変化させ、対ソ関係の改善に乗り出そうとしている。この点が私たちがもっとも注目すべきところなのである。

すでに中ソの事務レベルの次官級会談が行われ、ブレジネフの葬儀の際、外相会談が行われた。米国はこれまでチャイナカードをちらつかせてソ連を牽制してきたが、今やこのカードは裏まで相手にみせてしまったといえる。逆に中国がソ連カードを握って米国を牽制している。

## 華国鋒体制から鄧小平体制へ

今日の中国にとって政治的エポックとなったのは、1978年12月に開かれた中国共産党三中全会（第3回中央委員会総会）である。ここで現在の鄧小平―胡耀邦のリーダーシップがほぼ固った。

毛沢東の死後、華国鋒体制下で鄧小平は徐々に勢力を伸ばしていた。華国鋒は毛沢東の側近で、文化大革命に賭けていたが、鄧小平は文革で痛めつけられた側であり、2人は水と油の関係であった。

毛沢東政権末期の激動はいわば側近体制の内輪もめである。毛沢東、江青ら毛王朝を警護する役目の北京衛戍区8341部隊特務公安関係元締め汪東興が華国鋒の側に寝返り、江青、張春橋王洪文、姚文元の4人組を監獄に投込み一段落した。以後78年の三中全会までは過渡期に当る。この間、華国鋒にとっては、路線的、思想的対立関係にあった鄧小平グループに、いつ脚元をすくわれるか分らない状況にあった。華国鋒にとって政治的財産は毛沢東のお墨付だけであったがために、やがて彼は力を失っていった。

三中全会で鄧小平が力を得てから、経済政策面で復活した陳雲が影響力をもちはじめた。彼は長い間、重要なリーダーでありながら毛沢東の政策に反対したがゆえに不遇におかれていた。当時鳴り物入りで宣伝されていた日中経済関係の改善に対して彼は「再び日本の独占資本に騙されてはいけない」と水をかけた。日本からプラントなどをどんどん輸入するなどはもってのほかだとしたためにプラントキャンセルの問題が起った。陳雲自身は縮小均衡型の経済理論に立脚するオーソドックスな社会主義路線をとる人であり、「調整」の名のもとに経済計画を大幅に転換した。

また、胡耀邦のように鄧小平の部下で、文化大革命の時、一時は行方不明を伝えられた人々がつぎつぎに復権してきた。

三中全会に次いでエポックとなったのは、81年6月の六中全会である。ここで2つの注目すべき出来事があった。第1は、華国鋒が党主席から下ろされ、胡耀邦が後任に就いたことであり、第2は、「建国以来の党の若干の歴史的問題に関する決議」との文書が採択されたことである。後者においては、毛沢東の政治が根本的に否定された。1950年代後半以来の、農業集団化、人民公社、大躍進政策さらに文化大革命に至る毛沢東政策は、結局中国をメチャメチャにしてしまったのだ、という烙印を押したのが六中全会なのである。今日では人民公社は解体過程に入っている。

こうした経過ののちに83年9月、第12回中国共産党大会が開かれた。大会では、「主席」という名称が廃され、代って「総書記」が党の最高リーダーシップを握るように党規約が改正された。その地位には鄧小平が最も信頼する後継者胡耀邦が就任した。同時に華国鋒はヒラの中央委員に、汪東興は中央委員候補の末席にと、文革派はいずれも転落した。

それとともに党書記局が強化された。政治局からは文革派は追放されたが、葉剣英、李先念ら長老は依然健在であり、政治局の権限は温存したまま、中国共産党の政策立案は実質的に全部書記局でできるように改組したのである。書記局中心の党官僚独裁体制が完成したといえる。

その書記局内は鄧小平の部下ともいえる胡耀邦、万里、鄧力群、胡啓立らによって占められている。趙紫陽の国務院総理就任は妥協の産物であり、対外的な顔としてのお飾り人事である。事実上の意志決定は鄧小平、胡耀邦、万里のラインが行なっている。

書記局のメンバーの大部分は、かつての共産主義青年団の指導者である。鄧小平、胡耀邦体制が今後の中国をリードしていくとしたら、この書記局内にいる胡啓立という人材に注目しておいてもらいたい。

胡啓立は中央書記局書記としては只1人の50歳代、つまり53歳の若さである。彼は北京大学の機械系を出たエリートで、北京大学の学生運動のリーダー、共産主義青年団の幹部であった。1950年代末から60年代初頭にかけて中華学生連合会の主席としてたいへん活躍した人物で、文革中行方不明だったが最近復活してきた。

文革以前、鄧小平は中国共産党総書記、胡耀邦が共産主義青年団の第一書記、胡啓立が学生運動のリーダーであった。このトリオが20年間のブランクを隔てて甦っている。それが現在の中国共産党である。

こういう意味から第12回党大会は鄧小平にとってひじょうに満足したものであったに違いない。日本の多くの新聞はこの点見誤ったのではないだろうか。第12回党大会は鄧小平への抵抗が多く、彼の思うようにはいかなかった、というのが一般の論調であったように思う。

鄧小平にとって第12回党大会は決して政治的ゴールではない。彼はまだ引退できない。もし彼がいなくなっても、2度と中国が毛沢東時代に戻らないように、胡耀邦のような人材が失脚することがないように、中国社会から根こそぎ毛沢東的な要素を一掃することが彼のやり残している仕事である。

1977年、鄧小平が2度目の奇跡的な復活を遂げたとき、「自分の身体はあと8～10年は大丈夫である」といった。だから1985～87年ぐらいをメドに残された仕事をやりとげようとするだろう。彼の座石銘は「機失うべからず、時再び来らず」だ。チャンスは絶対把えなければいけない。彼は時間とタイミングをひじょうに重視する政治家である。自分の肉体的限界と今中国で何をしなければならないかという政治的タイ

ミングを常に考えている。これは毛沢東と違い根っからの党官僚であるからこそできる。

毛沢東はカリスマであった。側近が自分に有利なことだけを報告してくれる、そういうところに生きてきた皇帝型リーダーであり、これからの中国はこのようなカリスマ型リーダーから官僚型リーダーの指導の下に入っていく時代である。

新しい指導層の人材をみると、胡耀邦は共産主義青年団の時代、ソ連や東欧との結びつきをもっていた。その点鄧小平もフランス留学のあとモスクワにも留学していることは意外に知られていない。また外相呉学謙は、共産主義青年団の国際部長を経験している。まもなく胡耀邦は東欧諸国を歴訪するが、そのとき一緒に付いていく外務次官の銭其琛は中国外交部きってのソ連通で、ロシア語に堪能な人である。

これらソ連サービスの人たちが脚光を浴びてきている。このような人たちの対ソ認識が、毛沢東時代の対ソ認識とは根本的に異っていることを知っておかなくてはいけない。毛沢東時代から過渡期を経て、鄧小平時代の基礎が固ったのである。

## 復活するソ連派

今や中国政治を担っているのは、回り回ってかつて実権派とよばれた劉少奇、鄧小平路線の人々である。陳雲や彭真も実権派だ。逆に毛沢東系列、文革派は完全に打倒された。党中央では非毛沢東化が急速に進んでいる。

毛沢東グループと劉・鄧グループの間に中間派的な存在として周恩来、葉剣英、李先念といった人々がいる。周恩来はわが国にも馴染みが深い。数年前まで、建国の英雄毛沢東が晩年失政を繰り返したのを巧くカバーしたとして周恩来の評価は高く、中国の人々の周恩来に対する敬慕の念は大きかった。

しかし、最近になって周恩来および周恩来系列の人々への風当りは強くなっている。劉・鄧グループからいえば、「周総理、あなたは文革で何をしましたか」というところである。周恩来は晩年こそ毛沢東体制下の非毛沢東化を図ろうとして、四人組に痛めつけられたが、文化大革命、毛沢東政治そのものは肯定し、その女房役として尽力してきた。毛沢東政治が全面的に批判されてきた今日、周恩来の責任も問われることとなってきたのである。また謎となっている林彪事件の真相が将来明らかになると、周恩来の立場はもっと厳しくなるのではないかと思われる。

毛沢東政治がダメだったと判断されている以上、1950年代毛沢東路線形成時に反対し、粛清された人々が再評価されるのは当然である。それに当るのが彭徳懐将軍（国防相）の系列である。彭将軍は1959年の廬山会議で毛沢東の「大躍進」政策を批判、また朝鮮戦争の司令官、その後の国防相として軍近代化論争を起し、ソ連型の軍への転換を主張して毛沢東の怒りを買って失脚した。この彭国防相の下での総参謀長が黄克誠である。最近、彭徳懐の人気がひじょうに高まっている。現在中国で、政治家の人気投票を行えば彭徳懐がいちばん人気を集めるのではないかと思われる。彭徳懐系列の人材には、現国防相の張愛萍があげられる。

他に忘れられているが、1950年代半ばに失脚した潮流があった。東北に存在していた高崗グループである。高崗は、長征のとき陝西省一帯を死守していたので、中国革命での功績がひじょうに高いとされ、49年建国時には中央人民政庁副主席として天安門上に昇った。しかし、党は毛沢東、国家は劉少奇、国務院は周恩来とポ

ストが決まっていくと高崗は人事にひじょうな不満をもった。当時高崗は東北を指導していた。その高崗にスターリンが目をつけ、手を結ぼうとした。高崗は党中央と対立しはじめていたので、東北独自で通商貿易代表団をソ連に送り、通商貿易協定を結んだ。しかし、東北といえば、中国の心臓部、工業の基地である。中国共産党は1954年高崗一派を逮捕、摘発した。高崗は55年獄中で自殺したと伝えられている。党は「高崗らの反党同盟に関する決議」を採択して、東北を独立王国化しようとした罪で粛清したのである。

ところが昨秋の党大会後の名簿をみていると、驚いたことに高崗事件に連座した高崗の側近たちが全部復活していた。のみならず，彼らは東北の最高指導者になっているのである。例えば、瀋陽市のある遼寧省の党委員会第一書記郭峰は、高崗の部下でかつて東北人民政府の重鎮であった人である。また、黒竜省の省長に当る省人民代表大会常務委員会主任趙徳尊もそうである。

## 中国とソ連の共通性

最近、中国ではソ連に対する評価が好転している。資本主義経済は、世界同時不況でガタついているが、社会主義経済は計画経済だからそのようなことはなくて良いんだという雰囲気が出てきている。

私の感じからいうと、中国を訪ねるとき、日本から直接北京に入るとひじょうな違いを感じるが、モスクワからウランバートル経由で北京に入ると、同じ社会主義国のせいか余り違和感がない。

ロシア民族と漢民族が永遠に仲良くやっていけるというのではなくて、ソ連と中国は社会主義国として多くの共通性をもっている。戦略や外交などで一致点を見出すことは比較的たやすいと思われる。

現在中国は「日本に学べ、米国に学べ」といって日米へ留学生を送っているが、指導者たちにとっては本当は安心していられない。彼ら留学生たちが日米の経営システムを学んで帰り、その知識を活用しようとすれば、中国共産党支配下の国を内部から作りかえることになる。そのことが何よりも脅威であることを、誰よりも知っているのは鄧小平なり、胡耀邦なりの赤い貴族たちである。余り注目されなかったが、胡娜嬢の亡命事件と同じ日に中ソ間に10名ずつの留学生が交換されると発表された。中ソには共通基盤があることを現在の中国の指導者は熟知している。

同様に、米国がいくら武器輸出するといってもそこには自ずと限界があることを中国は知っている。中国の兵器体系の80％は依然ソ連の兵器体系であり、戦闘機はミグまたはミグの改良型で、ファントムやＦＸではない。米国が軍事援助しようといったとき、そこまではできないと断ったのが中国である。米中関係冷却化の原因はそこにあった。

もっと別の側面をみると、ポーランド問題で『連帯』のワレサ委員長が、中国はあれほどソ連を批判しているのだからと、支援を要請したところ、中国は支援どころか『連帯』を弾圧しようとしているヤルゼルスキー政権と友好関係を結び、近く胡耀邦総書記が訪問することになっている。『連帯』を認めることは、中国共産党の根本に触れることになるのである。中国国内で反体制運動を容認せざるをえなくなる。赤い貴族たちにとっては許しがたいことである。

中国内部で発行された秘密文献「ポーランドの教訓」によれば、「西側諸国におだてられて

ポーランドはプラントを導入したり、借金をしたりして、そのあげく経済は破綻した。その間隙を縫って『連帯』のような反革命分子が跳梁した。中国は絶対に『連帯』の二の舞を踏んではいけない」と内部に通達している。

中国とソ連は社会主義、共産主義という点で共通性がある。このことを日本人はここ10年間忘れていたのではないか。万里の長城やシルクロードをみると中国の偉大さを感じてしまうが、これらはいずれも数千年前のものであり、現在の中国は日本と全く社会システムの違う国だということを銘記しておかなくてはならない。にもかかわらず日本人は錯覚に陥ってしまい、万里の長城が雄大なら、毛沢東も偉大、現在の中国共産党も日本にとってひじょうに有難いものと考えてしまっているところがある。最近の日中関係や中ソ関係の変化は、このような日本人に警告を発しているのではないだろうか。

さらにわが国は、ソ連と対立するという日本の安全保障や戦略の根幹に触れるところまで、中国と一緒に手を組もうとした。そこまでいっても日中友好のもとで、正しいことだとされ、疑おうとしなかった雰囲気がある。もし中国がポーランドの『連帯』を認め、米国型の兵器体系を導入するというふうに、西側の陣営の一環になってくれるなら、大いに中国と一緒になってわが国の防衛や軍事問題、対ソ政策を考えてもよいだろう。ところが、一時中国は、まさに中国自身の利害のために大いにソ連を批判したが、決して西側の陣営に入ったのではない。わが国の政財官界人のなかにはソ連憎しの感情のあまり中国にひじょうに甘い見方をとった人がある。中国が日米安保条約はひじょうに結構であるといったり自衛隊は増強してもよいというおだてに乗っていたら、冷水を浴びせるように昨夏、わが国への右傾化、軍国化批判が起った。中国にすればかつてわが国へ来て大いにソ連批判をしていたのは毛沢東・華国鋒の時代であって、それは誤りであったといえるわけである。

最近、中国はソ連に近いインド共産党、フランス共産党とも和解した。ソ連に近いアンゴラ、南イエメンとも友好関係になった。アフガニスタン問題や、ポーランド問題でソ連と同じ立場に立つところの友好関係を結ぶのだが、そういうときでてくるのが胡耀邦である。胡耀邦は「かつてのように自分の党の方針を押しつけて、相手がいうことをきかないと修正主義だとか帝国主義の手先だとかいうのは極左時代の誤りである」といっている。いわば、毛沢東路線の誤りなのであって、自分たちは関係ない、といっているのである。

このような状況を考えると、中ソ対立というのはやはり内輪げんかに過ぎなかった、といえる。先述の彭徳懐系列は、ソ連との関係で考えればフルシチョフ主義者である。今や劉・鄧路線が主流になったのだから、フルシチョフ主義者も許容される。のみならず、かつての親ソ派

スターリン主義者であった人々が、現に復活してきている。彼らが東北のリーダーになっているのである。もちろん50年代のスターリン時代と同じようなことを彼らがいおうとしているとは思わないが、このような政治構造は毛沢東時代には考えられなかったことである。

このような中国の動きが、鄧小平がいなくなったら、再びどうなるのか分らないとしたら、余り心配はないのだが、私の目からみれば、もう中国は二度と毛沢東時代には戻らないと思う。中国はいかに困難であろうとも近代化は是非ともやりとげなくてはならない。それも一時期のように日本や米国に接近して、というのではなく、社会主義国家としての枠を外さない範囲でということになる。そうなれば、ソ連と中国の間には共通項が多く生れてくる。

今後の世界は、基本的には米ソの冷戦構造が続く。資本主義体制と社会主義体制の違いはそう簡単には解消しない。むしろ社会主義体制はこれからも一段と危機を深めるだろう。内部から崩壊してくるかも知れない。今やマルクス主義は国民、国家のレベルで実験した場合、どこでもうまくいかない、ということが分ってきた。21世紀になると、マルクス主義というのは19世紀の思想であったと思想史の課題としては語られるけれど、やがて社会主義にとっては、チェコやポーランドでみられたように、成熟した社会主義から「社会主義」を離脱する方が、歴史の進歩になっていくだろう。そうしたときに中国やソ連がずっといがみあっているだろうか。社会主義の危機が深まれば深まるほど、中ソはひとつの共通基盤の上で連帯するのではないかと思う。

最近の中ソ関係は、国際政治のパワーポリティックスの上で一時的に米中関係が冷却化したから中国がソ連とよりを戻すとか、そういうジェスチャーを示すということではなくて、より本質的なところで接近していると考えられる。中国の内部が根本的に大きく変わり、それがそう簡単には覆えらないだろう。社会主義の基盤を守ろうとすればするほど中国はソ連のあとを追っていく。わが国の政財官界人の一部にあったような、日中友好をすすめていけばやがて中国も日本のような社会になるといった期待は、余りに早とちりの議論である。

## 必要な国際認識

中国問題を考えるうえでは、中国の国家の成立ち、党の体質を念頭におかなくてはいけない。中国の古い諺に「山上において両虎をみる」というのがあるが、今の中国は山上に居て、米ソ両虎が闘うのをみている立場にある。1970年代初頭のように日米一緒になってソ連を批判しようとか、ソ連が攻めてくるから防空濠を掘って最後まで闘うとかはいわなくなった。

これらをみていると、結局、中ソが日本の防衛、安全保障についても、かなり一致した立場の方へ行くのではないか、と思う。今まで私たちは共産主義政権同士の内輪げんかに期待し、それにわが国の防衛や安全保障を委ねたところに大きなまちがいがあったのかも知れない。

もしそうであるならば、やはり私たちは西側諸国の一員としての自覚を新たにして、拡大した経済規模にふさわしいしっかりした、国際認識を身につけていかなければならないだろう。

なかじま　みねお・昭和11年長野県生れ35年東京外国語大学中国語科卒業、40年東京大学大学院社会学研究科卒業、44年東京外国語大学助教授、52年同教授、現在に至る。